

Covid-19が人と動物の関係に及ぼした影響の検討—地球規模の共通体験としてのパンデミック

柿沼美紀*

日本獣医生命科学大学 比較発達心理学研究室

Covid-19 as a global experience and its effects over human-animal bond: similarities and differences across cultures

KAKINUMA Miki*

Laboratory of Comparative Developmental Psychology, Nippon Veterinary and Life Science University

緒言

2020年、Covid-19が地球上に広がり、多くの国はその感染対策としてロックダウンを実施している。ロックダウンは人の生活を大きく変えるだけでなく、共に暮らすコンパニオンアニマルにも大きな影響を与えた。パンデミックのもと、人は自らの身を守るために、また政府の要請により通常よりも長い時間を家で過ごすことになった。人々はこれまでに経験したことがない窮屈で、不安や不便さを経験する生活を強いられた。本研究ではパンデミックの経験がコンパニオンアニマルとの関係に及ぼす影響を調査した研究を分析し、基本的な人と動物の関係について検討する。

方法

グーグルスカラー(研究論文検索エンジン)を用いて、Covid-19, dog, cat, ownerの単語で文献を検索した。犬猫の感染に関するものを除いたオープンアクセスの調査論文25本の内訳についてまとめた。

結果

2020年に出版されたものが6本、2021年8月までに出版されたものが19本であった。

研究方法は、web調査、電話での聞き取り調査、インターネットの単語検索等であった。

論文の調査対象国は表1のとおりである。タイトル内訳は表2の通りである。

複数の国で、ロックダウン期間中の保護犬、保護猫に関する問い合わせや譲渡数が増えている(Ho, Hussain, Sparagano 2021, Morgan 2020)。一方、セ

表1 論文の調査対象国

調査対象国	論文数
イギリス	8
イタリア	3
インド	3
アメリカ	2
オーストラリア	2
イスラエル	1
スペイン	1
セルビア	1
ニュージーランド	1
各地	3

表2 タイトルに含まれていた単語

単語	論文数
犬	10
猫	2
メンタルヘルス	6
咬傷(dog bites)	3
ペットを迎え入れる(acquisition, adoption)	3
人と動物の関係	3
動物福祉	2

ルビアでは新規にペットを飼育する人が減っている(Vucinic, Nenadovic, Vucievic 2021)。

イタリアとイギリスではロックダウン中に子どもの咬傷事故が増えている(Parente et al. 2021, Tuloch et al, 2021)。インドでは普段から男性が咬傷事故で

*連絡先: kakinuma-miki@nvlu.ac.jp

病院を受診するが、ロックダウン中は受診数が減っている (Saleem et al. 2021)。

多くの論文がペットの存在が精神的な安定につながると予測していたが、全体としては、大きな影響はなかった (Jeziarski et al. 2021)。ペットがいたために孤独にならなかったという報告もあるが一方で、ペット飼育が負担という報告もあった。

イギリスではロックダウン中は散歩の時間や回数やペットと過ごす時間が増えていたが、ロックダウン後に犬が留守番や散歩時間の減少に耐えられるか、という心配もあった (Holland et al. 2021, Owczarczak-Garstecka 2021)。同時に、犬の問題行動が増えたという報告もあった (Bowen et al. 2020)。また飼い主がコロナに罹患した場合の心配 (Kogan et al. 2021) は多かった。

資源の不足としては、インドやパキスタンでワクチンや治療薬、フードの不足 (Madan, et al. 2020)、米国での保護施設の餌不足などが報告されている (Kogan et al. 2021)。

ロックダウンによる外出制限のためペットショップの動物の不適切な世話 (Knawal, Zahra, Hussain 2021) や、地域の野犬の餌やりが減る (Pawar, Tawde, Mane, 2021) などの影響も報告されている。

考 察

全体としては、犬の研究が猫より多かった。また国

によって調査のポイントが異なっており、人と動物の関係は多様であることが伺えた。

コロナに伴うロックダウンにより地球上の多くの人々の突然生活が制限され活動範囲が狭まった。そのような時に人はコンパニオンアニマルとの生活を求める傾向があることが示唆された。咬傷事故のデータからは、欧米とインドでは犬と人の関係が異なることもうかがえた。また野犬にとっては、人流の多さはその生存率と関連していることも伺えた。

コロナの影響は多様であるため、ペットの存在のみでコロナ禍の生活の質を予測することは難しいようである。精神的な安定に関しては、より詳細な調査を行う必要がある。

日本はロックダウンは経験していないため、世界の多くの地域とは状況が異なる可能性がある。日本ではペットの販売数は増加している。咬傷事故や餌不足、ワクチン不足に焦点をあてた報告は見られなかった。コロナ禍でも日本においてはペットを取り巻く環境は比較的安定していたと思われる。

利益相反

本研究に関して申告すべき利益相反関係にある個人及び団体は存在しない。